

7 南原繁にとっての「教養教育」

『南原繁¹ 回顧録』より

聞き手：相原茂

¹南原 繁：戦後最初の東京大学総長として、矢内原忠雄らとともに現在の東京大学の基礎を築いた。

南原 一般教育（リベラル・アーツ）というのは、戦後の新しい傾向としてアメリカの大学が言い出したことで、ハーヴァードのコナントの提唱ですね。こちらの旧制高等学校というのは数は少ないし、十八世紀のイギリスの紳士教育ですね。それはそれでいいのですが、正直な話、あの三年間というのは僕も知ってるけど、遊んだものですよ。やる内容と言えば、中学校で習ったものを少し手直したような——国語にしても、歴史にしても、漢文にしても。遊んだんですよ。余裕をもったということです。そうすると自ずとそこから人間が伸びたという気になった。いい点もあったろうし、悪い点もあったでしょう。ただ、どっちにしても人間をつくる。単位なんかにとらわれずに、もっと自由に人間をつくる。それが教養の目的だと思います。

それを三年というような呑気なことをせずに、一年か二年くらいでやろうというのが新しい大学の教養部です。のちに学部との関係で年限のことが問題になりますが。それを昔の十八世紀の紳士教育でなく、市民の、多数の大学生というのはなにも指導者になるというのではなく、市民としての教養を身につける、そういう意味で、大学というのを従来の高等学校のように制限せずに各地につくった。そういう意味では新しくできた二十世紀の教養——市民たる民衆の教養に発展してきたわけです。そこに理念がある、だから時間数とか単位とか、あまりこまかいことをせず、もう少し自由にやってもらいたい。

——特に大学において人間性の復興なり、完成なり、これはすべて専門の学問に置いてそうだと思うんですが、かなり直接的にそういう役割を持っている教養課程なり、一般教育について、当時のこれを導入された先生方は内容を具体的に考えられていたと思うんです。それは今行われているものと大分違うんじゃないかと私は疑っているんです。（中略）その辺のことを……。

南原 実際にはいろいろ難しいでしょうね。各科目について具体的にどうしてゆくかということになると、我々が考えたようにはゆかないでしょうが、要するに「普遍的な知性」というのが、一番の根本になると思うんです。それを踏まえての自由な教育ということなんでしょうね、理想的には。それを個々の歴史をやったり、政治をやったりするところにあてるといっていいでしょう。

——（中略）科目の方も、専門課程の前段みたいになってきた。それに我々昔の教育をうけたものはそれからなかなか抜けきれない。大学における一般教育を受けてこなかった、といって昔の高等学校的なものでは意味をなさんでしょう。語学関係では比較的その悩みは少ないが、人文系、社会系、自然系は二十年たってもまだとまどってる。

南原 それは実際難しいでしょう。けれども、語学でも教科書の選び方によっては今のような意味を持ってやれるでしょう。一般教育には自然科学もあるんだから、全行程というわけにはいかないから、自然史を教えるなり、発達の段階をもってくるなり、それはそれでいいと思うんです。

——僕は先生が先程「自由」とおっしゃったのにわが意を得たんですが。

南原 特別の方法があって特別の科目を教えるわけでないんで、それぞれを通して、いかにして各々の知性を引っぱり出してくるかにあるわけなんで、だから、教え方にあるでしょう。同じものを教えるにも。

——何をやっていいと私は言うんですが。

南原 私はそう思いますよ。特別の科目があるわけではないのだから、一般的なものを持ちながら、講義外のものをどこか学生に訴えたり、学生から引き出したりすればいいんじゃないかな。

——本郷では、例えば、政治史ではここまでは教えておかねばというようなものがあると思うんですが、教養課程では……。

南原 卒業生も言うし、私もいうんですが、「学校で習ったことは本当に役に立たん」と。僕は卒業してノート全部焼いちゃった。それで講義の間に、先生がおもしろく話するでしょ、それは憶えていますね。それが将来役に立つんだなあ。あとは専門のことは、本をみればいいわけでしょう。ノート以外の、行間の、人間と人間とのふれあいだな。